

19世紀末から20世紀初頭におけるベトナム知識人の 日本の近代化についての認識

グエン・ティエン・ルック

はじめに

19世紀末に、日本は国の維新・近代化を進め、世界における先進国およびアジアにおける唯一の大国となった。日本の維新・近代化は偉大な事業であり、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ベトナムをはじめアジア各国の広範にわたって影響を与えた。

本論では、19世紀末から20世紀初頭において、ベトナム思想家が日本の維新・近代化をどのように認識したかについて分析・評価を行う。具体的には、歴史資料からベトナムの代表的な知識人である、19世紀末のグエン・チュオン・トとグエン・ロ・チャック、20世紀初頭のファン・ボイ・チャウとファン・チュウ・チンの4名を選び、日本の維新・近代化に対する彼らの認識を分析・評価する。

1. グエン・チュオン・トによる日本の維新・近代化についての論説

グエン・チュオン・ト（1830～1871年）は、19世紀後半におけるベトナム最大の改革思想家である。クリスチヤンの家庭に生まれ、幼い時、故郷の儒者から漢字を学び、その後、ゴーティエ伝道師からフランス語と世界についての新たな知識を学んだ。

グエン・チュオン・トは二度の海外旅行を経験した。1回目は1859年から1861年にかけて、香港・ペナン・シンガポールなど、アジアの諸国・地域を回り、2回目は1867年にフランスその他のヨーロッパ諸国を旅した。これらの旅と外国書籍や新聞から得た知識を通して、当時のベトナム知識人よりも新しい知識を身に付けることができた。その知識をもとに、国の根本を守り、植民地状態から完全に解放されるためには、ベトナムを全面的かつ抜本的に改革する必要があると確信した。こうして、グエン・チュオン・トは立て続けに提案書をグエン王朝（フエ朝廷）に送り、多くの重要・具体的な改革を提案した。

グエン・チュオン・トの改革思想は日本の近代化とほぼ同じ時期に形成された。彼が日本の近代化をどのように認識していたか、また、日本の近代化が彼の認識に



写真1 グエン・チュオン・ト
出典:en.wikipedia.org/wiki/Nguyễn_Trương_Tộ

どのような影響を与えたのかについて、以下に分析する。

1867年のヨーロッパへの旅で、グエン・チュオン・トは日本の代表団がパリの国際展示会に出席していることを知った。彼は、「済急八条」に次のように記した。

日本は多くの者を西洋へ留学させて西洋の状況を把握している。現在、一人の皇子と35人の同行者が牧師を伴ってパリへ行っており、そこで、学生を派遣するための大学施設を設立している¹。

ここから、日本人が西洋へ留学する状況にグエン・チュオン・トが関心を抱いたことが明らかにわかる。

改革案の中で、グエン・チュオン・トは特に、日本が兵器を購入し、西洋の軍事専門家を日本へ招聘して日本国内に兵器工場を設立することについて強い興味を示した。彼は次のように述べる。

日本人は目下10万丁の銃と各種機械のセットを購入しており、日本で工場を設立するために二人の(西洋人の)技術者を雇った²。

しかし、日本の近代化について最も強く言及したのは、彼の人生最後の年(1871年)に書かれた、「鎖国でなく開国すべき」という意見書である。

昔の日本人は元々商人ばかりであり、明代の中期からオランダ・ポルトガルと友好関係を結び始めた。次に米国の援助を得るために彼らを招き、広く世界を見るための礎を築いた。それ以降、彼らは造船を手がけ、武術を鍛え、商業と工業の発展を優先して国を強大にした。日本は、西洋の小国という美名で賞賛され、中国が日本を屈服させることは困難となった。最近では、英国とフランスにしばしば干渉されてはいるものの、強い内政と外交が整えられているので一切動じない。例えば、三年前に英国とフランスが軍艦を派遣して日本に圧力をかけようとしたが、米国とオランダの介入のおかげで免れた。これは他国との友好を築いたことによる成果である。今日、日本は他国と広範な外交を展開す

1 チュオン・バ・カン『グエン・チュオン・ト——人と遺稿』ホーチミン市出版社、1988年、229頁。

2 同上、279頁。

る計画を持っている。日本は近代化の追求がどの国よりも顕著である。それは
(ベトナムの) すぐそばにある手本³なので、他国のことを述べるまでもない。

上記の文章を通じて、グエン・チュオン・トが日本とオランダ・ポルトガルとの友好関係について非常に興味を持っていたことがわかる。特に、「米国の援助を得るために彼らを招き、世界を広く見るための礎を築いた」というくだりは、米国が日本へ来て開国・開放を迫り、日本と「日米の平和条約」を締結したことについて述べている。日本はその後、他の西洋諸国とも類似の協定を締結し、西洋の大国の圧力から自国の独立を守るため、各国間の相互協定を利用した。フエ朝廷に送った外交政策について論じた提案書の中で、グエン・チュオン・トは何度も「開放政策」「多くの国との貿易協定の締結」「大国を抑制してベトナムの独立を守る」ことを提案している。

上記の文章の中でも、日本の近代化について言及されている。グエン・チュオン・トによれば、日本の近代化は、「どこの国よりも顕著で、すぐそばにある手本」である。

こうしたグエン・チュオン・トの日本の近代化に対する認識は、洪仁玕 (Hung Jenkan) や馮桂芬 (Feng Guifen)、李鴻章 (Li Hungchang) など、当時の中国の知識人の認識に近い。彼らも日本の開放政策や西洋からの学習、産業の発展などを賞賛し、その政策により日本が大国になるのを予想した。しかし、中国の知識人と違うところは、グエン・チュオン・トが日本の柔軟な外交政策と大国との相互協定の利用について関心を持っていたことである。彼によると、こうした政策があったからこそ、日本は独立を保持しながら発展できたと評価する。

日本の近代化についてのエン・チュオン・トの認識は、漢文書籍や新聞からというよりも、西洋の書籍・新聞や西洋人との接触を介して形成されたと考えられる。これが本当であれば、非常に重要な結論になる。すなわち、ベトナム改革知識人の世界についての新たな認識は、多くの研究者が説明するような中国からの改革書籍や新聞からではなく、西洋の書籍・新聞や西洋人との接触を含む、他の様々な方法で形成されたものと見られる。

2. グエン・ロ・チャックによる日本の維新・近代化についての論説

グエン・ロ・チャック (1853～1898年。以下、「チャック」) も19世紀末におけるベトナムの代表的な改革思想家である。高官の家庭に生まれたため、教育の機会に恵まれた。チャックは成績優秀で、頭も非常によかったが、試験制度に関わりたがらなかった。おそらくは当時のグエン王朝の官吏の大局的な問題に対する解決能力

3 同上、408～409頁。

の無さや当時の学習スタイルの無意味さがわかっていたのだろう。

チャックには当時の知識人よりも多くの利点があった。チャックは、中国の洋務派の著作、特に、義理の父チャン・ティエン・タン高官の公邸に保管された、グエン・チュオン・トがトゥドック帝に送った提案書をたくさん読むことができた。これらの著作とグエン・チュオン・トの提案書こそがチャックのその後の改革思想に大きな影響を与えた。

チャックの改革思想は日本の近代化が大きな成功を収めた時期に形成された。その頃、日本はすでに「豊かな経済力と強力な軍事力を持つ国」になっていた。「自力・自強」精神および稀に見る努力の結果である日本の近代化は、チャックの改革思想に大きな影響を与えた。チャックは、朝廷に、この「自力・自強」精神を学ぶことと、国の発展のための抜本的改革の実施を呼びかけた⁴。

19世紀末に日本は、台湾の併合（1874年）、琉球を日本の沖縄県として組み入れた「琉球処分」（1879年）、朝鮮に対する干渉など、軍事力で世界の特別な注意を引いた。「世界」の情勢について一般的に論ずる際に、チャックは日本の状況に非常に注目し次のように書いている。

混乱の状況の中で併合が形成される。（フィリピンの）ルソンという土地は明代から現在まで300年以上もスペインに服従してきた。早急に自立したいがそれはいかにも難しい。インドもビルマも同じ悩みを抱えている。シャムはそのまま独立を維持しているが、一切近隣諸国と調和する気持ちを持っていない。日本はますます発展しているが、日本が強くなればなるほど、中国の心配は西洋だけではなく、日本にも向けられるわけだ。しかし、中国の状況はまだ心配には至らない。「智」だけで西洋の「命」を超えられるわけではなく、「姿勢」がそれらの国の「強さ」を結束させるのだ。西洋の政策は完全に中国との商業関係に集中しており、それは無限の利益資源だ。ある国が中国を攻勢した場合、その他のすべての国の不利益になるため、彼らはともに対応する必要がある。それは相互協力の姿勢であるため、仕方がないことだ。（中国）は自国を救うことはおろか、他の国を助けることもできない。高麗はロシアに依存している。琉球は日本に併合された。しかし、清朝はまだ何もせずに見ているだけだ。今、我々は持ってもいない虚名を真剣に捨て、本当に持っている力だけで活動すべきだ。そうすれば、明確に制定することができ、他人が割り込んで状況を混乱させることはできないはずだ。そして、上下関係もなくなり、朝晩に安定する。内部には人民の苦しみと官吏の悪弊があり、外部には西洋の状況と商船の利益がある。すべてをすぐに整頓しないといけない時期だ。遠くは越王句踐を、近

4 マイ・カオ・チョン／ドアン・レー・ザン『グエン・ロ・チャック——陳情書と文詩』ハノイ出版社、1995年、121～122頁。

くは日本を手本と見るべきだ。それができれば、今すぐに国境を確定して平和を維持することはできないとしても、いつかは必ずや大事業を実現できるはずだ。⁵

要するに、日本の近代化の初期段階しか知らないグエン・チュオン・トと違って、チャックはその近代化の最終段階までも理解していた。チャックは日本が大国となり、東アジアにおける紛争に積極的に関与しているのをはっきりと認識していた。日本が中国にとって直接的かつ危険な脅威となるのを明確に予測していた。この点に関して、フィン・トゥック・カン『我が国の学者の予測したこと』という著書の中で大いに賞賛している。

その文章は 40 年前、すなわち、中東紛争前に書かれたが、いまでも的を得ている。我が国の学者は豊富な知識を持っていないなどと言う人がいるであろうか。⁶

日本の近代化について具体的かつ十分に述べているわけではないが、上記の文章を通じて、チャックは、日本が近代化を通じて「豊かな経済力と強力な軍事力を持つ国」になり、中国の併合に関与するのを早期に認識していたことが理解できる。

日本からの脅威が明確にわかっているにもかかわらず、チャックは日本を学ぶよう呼びかけた。チャックは、「自国を救うことができない」グエン王朝に依存せず、日本やドイツなど、近代化に成功して世界の大国になりつつある国に学ぶべきだと高らかに主張した。日本や東アジアの状況について、様々なリソースから得られた知識に基づくチャックの分析と予測は、鋭く正確であったと言えるだろう。

このように、日本の近代化は 19 世紀後半のベトナム知識人に大きな影響を与えた。当時のベトナムの著名な二人の改革思想家、グエン・チュオン・トとグエン・ロ・チャックは日本の近代化について非常に関心を持っていた。彼らは、日本の維新・近代化を手本としてフエ朝廷に自国を改革・刷新するよう提案した。ベトナム知識人の近代化についての認識は不十分かつ不完全だったかもしれないが、当時の状況において、少なくともグエン・チュオン・トとチャックがこのような認識を持っていたのは非常に進歩的なことである。

5 同上、139～143 頁。

6 グエン・ヴァン・フェン『グエン・ロ・チャックと遺稿』ハノイ社会科学出版社、1995 年、109～110 頁。

3. ファン・ボイ・チャウによる日本の維新・近代化についての観点

ファン・ボイ・チャウ（1867～1940年。以下、「チャウ」）はベトナムの19世紀初頭の民族運動を主導した代表的な人物である。1905年初頭に、日本に行き、有名な東遊運動を立ち上げ指導した（1905～1909年）。チャウは、日本で明治維新に関する書物を大量に読む機会を持つことができ、直接、明治維新の成果を吸収できた。日本における維新・近代化に対するチャウの認識は非常に仔細で優れたものだった。

ベトナムにいた時から、チャウは、維新・近代化によって「豊かな経済力と強力な軍事力を持つ国」になった日本について非常に強い印象を受けていた。日本に行く前の香港での待機中に、彼は日本の維新・近代化について詳しく学んだ。自身の著作の中で『日本維新史』について述べている。チャウは、上海広智書局が1902年に刊行した『日本維新三十年史』をこの時期に読んでいたのかもしれない。それは、元々高山林次郎をはじめとする日本の研究者が編纂して1898年に東京で出版した『明治30年』（維新30年）で、中国語に翻訳されていた。この作品を読むと、維新30年後の日本の政治・経済・文化・学術・習慣の変化について、詳しく理解できる。中国語の翻訳書には、日本の近代化の偉大な実績を賞賛した付録がある。

日本に足を踏み入れた時、チャウは次のように書いている。

数カ月東京に滞在している間、日本とロシアの戦争の話を聞き、日本の政治・教育・外交・産業などの現状について知り得た。

それを見て、自分が今まで自国内に身を寄せ合うように留まっていたことを恥ずかしく思う。そのせいで、知識も浅く、思想も行き詰まっており、何も知らなかった。私の仲間も皆、私と同じだ。自分の知り合いをすべて「アン・ホア・タム・ダオ」（日本のこと）へ連れて来て、彼らの頭脳と目をまったく新規に変えることができなくて残念だった⁷。

ところで、チャウが日本へ行ったそもそもの目的は武器の援助を求めることだった。これは失敗に終わったが、日本の近代化について研究する機会を得て、チャウは新しく独特な考えを持つことができた。つまり、チャウは、維新成功の理由の一つは留学だと考えた。

彼らは当初から人材を外国へ派遣して知識を広げさせるなど、人材を育成したため、これほど偉大で鮮やかな事業を実現できた。

7 チュオン・トー編『ファン・ボイ・チャウ全集』第3巻、トゥアンホア出版社、1990年、184頁。

また、チャウは日本の近代化における知識人の役割を高く評価した。

本を読むのは確かに知識人だけだ。偉大な思想を持っているのは確かに知識人だけだ。皆さん、コシュート・ラヨシュ (Lajos Kossuth) やルソー、吉田松陰や大隈重信など、昔の偉大な才能の物語を記した欧亜州の新しい本を読んでもください。革新とは世界を創造することで、これこそがおそらく知識人の力ではないでしょうか。⁸



写真2 ファン・ボイ・チャウ
出典:en.wikipedia.org/wiki/
Phan_Bội_Châu

さらに、チャウは日本の近代化が持つ多くの問題点を詳しく理解し、日本の貿易開放政策を高く評価した。

日本の維新の前、欧州と米国の大国は日本の三つの島に焦点を合わせた。そこで、当時の勤皇志士で、港の閉鎖を頑固に主張した人は少なくなかった。しかし、幸いなことに、吉田松陰や福沢諭吉、後藤正二郎ら指導者が西洋に学ぶことを声高に主張した。彼らは、西洋人の排斥を失策とし、知識の流入こそが当世向きであるとした。この方針が採用され、新しい学問が発展し、新しい知識が豊富になり、それが維新の基礎となった。今は欧米よりもはるかに豊かだ。当初、江戸幕府が他の国との条約に署名することに損がないわけではなかったが、それを利益に変えるチャンス⁹が彼らにはあった。結局この条約は日本にとって何の損害にもならなかった。

このように、チャウは開放政策（開国）と鎖国政策^{きこく}を対比し、日本の維新での開放政策を高く評価している。

チャウは日本の経済・社会発展における貿易の役割を特に強調する。

日本は現地生産に非常に乏しく、売買だけが盛んである。この国の人々は港に依存しており、それを神から与えられた宝だと考えた。外国人との貿易には大金が必要なため、彼らは多くの株式を集めた。彼らの株式モデルは非常に発展した。¹⁰

8 チュオン・トー編『ファン・ボイ・チャウ全集』第2巻、55頁。

9 同上、472～473頁。

10 同上、90頁。

政治的にはチャウは、立憲体制と天皇と議会の役割を強調した。

日本の天皇制では、国民は天皇を父親のように尊敬し、天皇は国民を我が子のように愛し、孤児を育て、病人を労わる。病院や学校では何事においても常に他人を優先してから自分のことを考える。講和・開戦・行軍・税金徴収・軍隊配置など、すべて国民の議会によって決められる。¹¹

ここで、チャウが日本の政治制度を美化していることがわかる。しかし、ここでの美化は、ベトナムの植民地政権に反対して自国民の意識を目覚めさせるためだった。

最も注目すべきは、チャウが1907年に書いた『新ベトナム』の著作である。この中で、チャウは日本の維新を手本として将来のベトナムの展望を描いた。

維新の後、内治資格と外交権利はすべて私たちが保有することになり、文化事業がますます進展し、勢力範囲もますます拡大していく。維新の後、人々の知識が拡充され、人々の氣勢が上昇し、人権が興隆する。我が国の運命は我々人民が握ることになる。今の日本は将来のベトナムである。¹²

日本の近代化に関するチャウの認識には欠落している部分もあるが、19世紀の知識人のそれと比べると、非常に優れた総合的な認識であると評価できる。チャウによる日本の維新・近代化についての調査・研究は、研究者としてのものではなく、日本の維新・近代化の経験を手本として利用してベトナムの国民解放と維新に役立てるためのものだった。

4. ファン・チュウ・チンによる日本の維新・近代化についての論説

ファン・チュウ・チン（1872～1926年。以下、「チン」）も20世紀初頭におけるベトナム民族運動の代表的なリーダーの一人だった。チンはクアンナム省でのカンブオン運動に参加した。カンブオン運動の失敗の後、郷里に帰って学問を追求し始めた。1900年に、大学試験に合格し、翌年にフエの学士号試験に次席として合格した。しかし、その時点ですでに、古い試験制度には否定的だった。1903年にフエに行って官吏として勤めたが、すぐにやめて再び郷里に戻った。おそらく、グエン王朝の官吏の非力さに失望したのであろう。フエにいる間は、新学と接触する機会が多く、ファン・ボイ・チャウやフィン・トク・カン、トラン・クイ・キャップ

11 同上、198頁。

12 同上、256、273頁。

など、当時人気のあった多くの志士と交流し、すぐに新思考の主流に乗った。

1904 年に日露戦争が勃発し、日本はロシア軍に勝利した。この事件はチンの思想に大きな影響を与え、彼の思想を変えた。彼は次のように書いている。

突然雷が鳴って、空と大地が壊れ、日露戦争の余波と中国近代化の波が四方から押し寄せ、全国を覆った。それがベトナム国内を動かし政党も誕生させた。¹³



写真3 ファン・チュウ・チン
出典:en.wikipedia.org/wiki/
Phan_Chu_Trinh

1905 年に香港に行き、香港からチャウとともに日本へ渡った。日本で・チャウは東遊運動を指揮しており、ベトナムの多くの若者を留学させた。日本に数週間滞在している間に、チンとチャウは横浜と東京の様々な場所を訪れた。その中に慶應義塾大学という、福沢諭吉が維新のための人材養成を目的に設立した日本の有名な教育センターがあった。チンはこの旅について詳しく説明していないが、確かに日本の近代化に感銘を受けたはずである。

チャウは次のように書いている。

ファン・チュウ・チンはこの旅で主に日本文明の状況を見たかった。私に会ってからは私と所有者(クオン・デー候)と一緒に船に乗って日本に渡った。我々は横浜に行って東京で全ての学校と名所を見学し、日本人の多くのビジネスマンに直面した。数週間後、彼は私に次のように言った。「日本の国民の文化水準を見て、そして我々の国民の文化水準と比較すると、小さい鶏を老いたハヤブサと比較することと同様だ。今、あなたはここで勉強し、人民を目覚めさせることに全力を注ぎ、国内での教育は私に任せてください」と。¹⁴

チンは、チャウのとった武装闘争方針と日本の力を借りて国家の独立を達成する方針には賛成しなかったが、それは、日本の近代化を批判するものではなかった。それどころか、日本の有利な条件を利用して留学運動と知的啓発により人材を育成しようとするチャウの思想を支援した。そして日本から戻った後、チンはベトナムで、他の志士と一緒に維新運動を展開し、日本の慶應義塾大学と同じようなベトナムの「義塾」の設立を提唱した。そして、実際に、チンはハノイの義塾で演壇に立

13 グエン・ヴァン・ドゥオン編『ファン・チュウ・チン選集』ダナン出版社、1995年、525頁。

14 長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』平凡社、1966年、132～133頁。

ち自らの維新思想を熱弁した。

日本の維新・近代化について、チンは他の思想家と違い、軍事面にはあまり関与せず、民権と国民の文化水準の側面に強く焦点を当てた。次のように書いている。

今、欧亜州の状況を見てみよう。日本は我が国と同じ言語（漢字）を持つ同じ民族だ。40年前に彼らは憲法を制定して、国民を議会選挙に参加させた。国の政治は国民の意見を取り入れるため天皇は勝手に決定できない。そして彼らの国は繁栄して、今は東アジアでトップに立っているが、国民はいまだ天皇の権威があまりにも大きいことに疑いを持っている。明治天皇は数々の貢献により日本では正義・美德で有名だったが、明治の終わりには暗殺された¹⁵。

ここで、チンは日本の民権運動についても、「天皇暗殺」についても事実誤認をしているが、いずれにせよ、豊かな経済力と強力な軍事力だけではなく、民権も近代化の重要な成果の一つであるという認識を持っていた。この認識はチャウの民権に対する意識からあまり外れていない。

もう一つの重要な点は、チンが文明道徳の学習を強調して、文明道徳が重要だと考えたことである。彼は次のように論じている。

日本人が今日のように豊かになった理由は、ヨーロッパ文明を真似たからか、それとも何かモラルを変更したからなのか。我が国の人はいつも日本を、仲間・同門者・同文明だと自称しているが、彼らが進歩していることを褒めるだけで、なぜそのように進歩できたのかをまったく考えない。彼らは造船や銃の製造だけで金持ちになったのか、それともモラルも修正して今日のようになったのか。日本の歴史を読むと、彼らが自らの道徳の形成を非常に重視していることがわかる。明治維新から立憲を公表した24年後、旧幕府の動向を懸念し、憲法を制定しようとした人がいかに多かったのだろう。血を流し額に汗して懸命に努力し、今のような繁栄する国を作り出そうとした人がいかに多かったのだろう¹⁶。

日本の文明に対するチンの認識でユニークな点は、日本が西洋文明をそのまま受け入れるのではなく、独自の文明を築いたことに気付いている点である。チンは、文明は単に物質的なもの（造船・銃の製造）だけではなく、精神的なもの（道徳・倫理）も含んでいると考えた。この点で、チンの考え方は福沢諭吉の理念に非常に近い。

要するに、チンはチャウのように日本の維新・近代化について詳しく言及してい

15 グエン・ヴァン・ドゥオン編『ファン・チャウ・チン選集』、597頁。

16 同上、786頁。

ないが、彼の維新・近代化についての認識には精神文明への関心が含まれるという点で独自性がある。チンはチャウの暴力的な革命と日本に依存する方針には反対しているが、ベトナムの維新・近代化のため日本の維新に学ぶべきとの主張には最大の喝采を送っている。

結論にかえて

19世紀後半、ベトナムの改革思想家は日本の維新・近代化に注目した。しかし、彼らの日本の維新への関心は主に外交・軍事の分野にあった。ベトナムが次第にフランス植民地として併合されていく状況において、改革思想家はグエン王朝が維新・近代化により強大になった日本を手本に国を改革することで、国の残りの部分を保護するよう呼びかけた。一方で、ベトナムの改革思想家は、日本が維新・近代化の過程で西洋諸国のやり方を踏襲してアジア諸国の併合に関わることも明確に理解していた。

20世紀初頭、ベトナム民族解放運動の指導者たちは日本の維新・近代化についてより高い関心を持っていた。ファン・ボイ・チャウは反フランス闘争のため、日本へ行って武器の援助を求めた。日本滞在中に、日本の維新・近代化について調査・研究を進めた結果、日本を未来の新ベトナムを構築するためのモデルと見なした。しかし、日本滞在期間の終わりには、日本の裏の側面も明確に認識し、特に明治政府とフランス植民地政府との協力という、日本の外交政策を強く批判した。

ファン・チュウ・チンはチャウとは異なる。はじめから「非暴力、外国人へ期待せず」との主張を掲げ、日本の支援による反フランスとの武装闘争というチャウの方針を批判した。しかし、チンは日本の力を借りて自国の人材を教育すること、日本に学んで国の維新を実現することについては積極的に支援した。日本での滞在期間は短かったが、日本の維新事業から多くを学び、帰国後、慶應義塾大学の方針に倣い、未来のベトナム維新のための人材を養成するなど、義塾運動で積極的に活躍した。

チャウとチンは日本の民権運動や立憲の役割、日本の「精神文明」、特に愛国心・独立心・社会意識などに関して同じ視点を持っている。そのような思想は、グエン・チュオン・トやグエン・ロ・チャックなど、19世紀末の改革思想家たちの思想をはるかに超えている。

しかし、19世紀末から20世紀初頭にかけての日本の維新・近代化に関するベトナム改革思想家や革命知識人たちの一貫した主張は、日本の近代化を学びベトナムを改革・刷新することにあったといえる。

参考文献

1. チュオン・トー 『ドン・キン・ギア・トクと 20 世紀初頭の文化改革運動』 ハノイ出版社、1982 年
2. マイ・カオ・チョン／ドアン・レー・ザン 『グエン・ロ・チャック——陳情書と文詩』 ハノイ出版社、1995 年
3. David G. Marr. *Vietnamese Anticolonialism 1885-1925*. Berkeley: University of California Press, 1971
4. グエン・ヒエン・レー 『ドン・キン義塾』 ラボイ出版社、サイゴン、1968 年
5. グエン・ヴァン・ドウオン編 『ファン・チャウ・チン選集』 ダナン出版社、1995 年
6. グエン・ヴァン・フエン 『グエン・ロ・チャックと遺稿』 ハノイ社会科学出版社、1995 年
7. チュオン・トー編 『ファン・ボイ・チャウ全集』 10 巻、トゥアンホア出版社、1990 年
8. チュオン・バ・カン 『グエン・チュオン・ト——人と遺稿』 ホーチミン市出版社、1988 年
9. ホーチミン市社会科学研究所 『グエン・チュオン・トと国家の革新問題』 ホーチミン市出版社、1992 年
10. ビン・シン 『ベトナムと日本——文化交流』 ホーチミン市文藝出版社、2001 年
11. 近代日本研究所編 『近代の日本と東アジア』 山川出版社、1980 年
12. グエン・ティエン・ルック 『グエン・チュオン・トの改革思想の研究——19 世紀後半のベトナム改革形成の研究最初の一步』 『史学研究』 217 号、1997 年
13. 長岡新次郎・川本邦衛編 『ヴェトナム亡国史他』 平凡社、1966 年